

東邦大学学術リポジトリ



OPAC

東邦大学メディアセンター

タイトル	12th Annual North America Brain Injury Society(NABIS)Conference on Brain Injury
別タイトル	12th Annual North America Brain Injury Society (NABIS) Conference on Brain Injury
作成者(著者)	中山, 晴雄
公開者	東邦大学医学会
発行日	2015.06
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 62(2). p.159 160.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.62.159
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD73264160

12th Annual North America Brain Injury Society (NABIS) Conference on Brain Injury



中山 晴雄

東邦大学医学部脳神経外科学講座 (大橋)

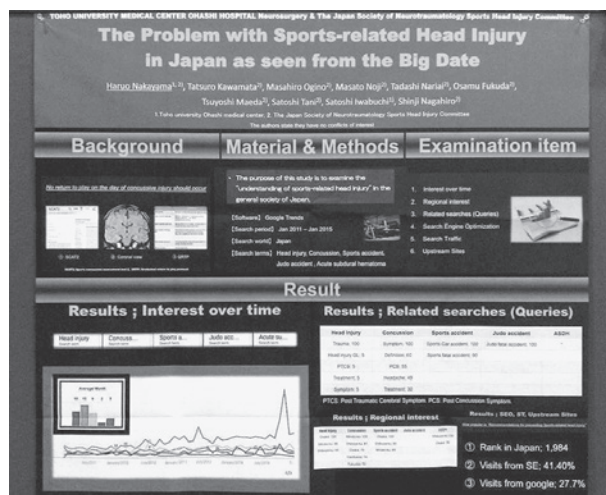
2015年4月29日～5月2日までサンアントニオで開催された第12回北米神経外傷学会総会 (12th Annual Conference on Brain Injury notice from North America Brain Injury Society) に参加した。本学会は北米神経外傷学会が主催する年次総会で、毎年4月頃に米国で開催され全米を中心に世界中から神経外傷に携わる関係者が集まり活潑な意見交換が行われる。

学会では、神経心理学から社会的サポートといった日本の学会ではあまり主題となることの少ない議題に始まり、画像診断からスポーツ脳振盪に代表される mild traumatic brain injury (TBI) や治療に難渋した severe TBI まで診断、評価、治療など多岐にわたる数々の報告や教育講演などが、早朝から夕方まで綿密なタイムテーブルに従って遅滞なく執り行われていた。全ての発表を聞くことは出来なかったが、渡米前から自分なりに計画していた予定に従い、希望したほぼ全ての発表を聴講することが出来た。なかでも、スポーツ脳振盪の評価に際して本邦でも使用されることのある、コンピューターバッテリーを用いた脳認知機能評価法の結果が、スポーツ選手の社会経済的背景の影響を受ける可能性を指摘した発表は、自分も実際に同バッテリーを使用した際に少なからず同様の印象を受けていただけに、非常に印象的であった。

今回の学会で私はスポーツ頭部外傷に関して、日本脳神経外科学会が2013年12月16日に一般市民に向けて呈示した「スポーツによる脳損傷を予防するための提言」が国民にどれだけ周知されているのかを、Search Engine Optimization (SEO) 解析により評価した検討についてポスターセッションで報告を行った。この提言は私自身が委員として活動し作成に関わらせて頂いたものでもあることから、本検討の結果は個人的にも非常に興味があった。残念ながら



Christopher Giza 博士と



ポスター発表

ら、いまだ本邦における周知が進んでいないことを示す結果となったことから、これまで以上に社会に対する啓蒙活動を進めていく必要があることを認識させられた。一方、前述した社会経済的背景を評価する検討は、本邦においてはほとんど行われていない評価であることから、私と同じポスターセッションで、これらを用いた検討を発表している演者達に質問を試みたが、みな好意的に回答してもらえ、知見を広げることが出来たことは、今回の学会参加での収穫の1つである。

またこの学会に参加する直前には、アメリカ神経学会でスポーツ頭部外傷に関するガイドラインの編集を筆頭で担当した University of California, Los Angeles (UCLA) の

Christopher Giza 博士のもとを訪問させて頂き、彼らの施設見学に加え、現在作成を進めている本邦の脳神経外科医へ向けたスポーツ頭部外傷の管理指針に関する数々の議論が出来たことは、非常に有意義であった。学会場でも、日本から参加した他大学の先生達とこれまで以上に交流を深めたことに加え、海外の研究者達との交流を広げることが出来たことは何事にも変えられない収穫であろう。個人的な印象だが、国際学会は大変雰囲気良く、参加者全員が質問や意見交換を行いやすいという印象を持っている。来年度も海外の学会に積極的に参加して、参加者達と有意義な議論が出来るように、日常診療だけでなく研究も進めて行きたい。